



第6回日韓文化交流基金賞

文化および芸術分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に創設された「日韓文化交流基金賞」の第6回（2005年度）授賞式が、8月10日にソウルのロッテホテルで行われました。今年度の受賞者は、姜南周氏（朝鮮通信使文化事業会執行委員長）、金光林氏（詩人）、李賢起氏（帝京大学教授）の3名に決定し、第21回日韓文化交流基金韓国訪問団の答礼晩餐会の場で表彰されました。



左から李賢起氏、藤村正哉日韓文化交流基金会長、姜南周氏、金光林氏

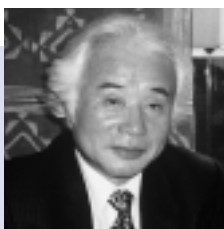
受賞者プロフィール



姜南周（カン・ナムジュ）

1939年生まれ

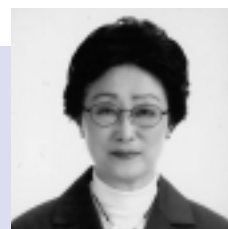
社団法人朝鮮通信使文化事業会執行委員長



金光林（キム・クワンリム）

1929年生まれ

詩人



李賢起（イ・ヒョンギ）

1935年生まれ

帝京大学文学部国際文化学科教授

受賞理由

釜慶大学校総長当時よりシンポジウムなどを開催し、日本、韓国、中国にまたがる文化交流の発展に努力するとともに、2003年には「朝鮮通信使文化事業推進委員会」を立ち上げ、現在に至るまで日韓両国の各地で行列再現事業を実施しています。さらに、「韓日協議会交流会総会」や「韓日文化交流祝祭」などを実施、茶道や書道といった文化・芸術界のさまざまな分野での交流を進め、日韓両国民間の相互理解の増進に貢献しています。

受賞理由

早くから日本の現代詩人（田村隆一、白石かずこ、秋谷豊など）の作品を翻訳して韓国国内で出版し、日本の詩人との交流を深めるなど、詩の世界での日韓交流の橋渡しの役割を果たしてきました。著書に『日本現代詩散策』（ブルン思想社、2003年）、『日本現代詩人論』（国学資料院、2001年）、『キムクワンリム詩集』（書肆青樹社、2002年）、『韓国三人詩集 具常、金南祚、金光林』（土曜美術出版販売、1998年）などがあります。

受賞理由

韓国における日本文学・文化研究、日本語教育の先駆者として、日本研究の振興、発展に大きな役割を果たしてきました。日本においても大学などで韓国語教育の強化にあたり、両国間の学術・文化交流に大きく貢献しています。KBSの日本語講座、NHKのハングル講座に出演するなど、両国語の普及にも努めてきました。編著書に『学習日語辞典』（斗山東亜出版社、1997年）、『高等学校日本語自習書（上・下）』（進明出版社、1996年）などがあります。

基金賞受賞者のお一人である姜南周さんのエッセイを紹介します。

石の唄ひびけ—通信使が訪れた島での出会い

社団法人朝鮮通信使文化事業会執行委員長 姜南周

その小さな島を訪れることができたのは、うれしい限りであった。福岡の東北に位置する人口400人ほどの小さな島、相島（福岡県糟屋郡新宮町）である。あいのしま320年余り前、島民の数より多い500人の朝鮮通信使が来たというのは事実だろうか。驚くとともにその地に興味を引かれていた。いつか行ってみたいと思っていたが、昨年11月、ついにその機会に恵まれた。

1682年、朝鮮通信使の上陸が決定すると、島に大急ぎで波止場が築かれた。その労役に従事させられた相島の漁民たちの苦労はいかばかりだったのだろうか。島の案内板には、朝鮮通信使のために鯛は広島で買い求め、鮑はどこそここで、ほら貝はどこで、うまい米はどこで調達したなど、朝鮮通信使を歓待したという内容が書かれていた。

もちろん朝鮮通信使が日本を往来した理由については多少異なるいくつかの解釈があるものの、彼らを歓待したことには異論がない。このように朝鮮通信使が歓待を受けた理由は、一つが「文化の伝道師」であり、もう一つが「平和の使節」であったという点ではなかろうか。

元々、近い両国には争いが多かった。それは世界どの地域でも同様である。しかし今後、われわれ両国は争いのない相互発展を模索しなければならない。私たちが朝鮮通信使の文化活動を再現しているのも、当時、彼らが文化交流を通じて平和を分かち合おうとしていた努力を見習うためである。

島を訪ねた翌日、新宮町では国分祭という祭りが開かれた。そこで私は再び驚かされた。全校児童10人足らずの相島小学校あげて、子どもたちが朝鮮



2004年下関にて朝鮮通信使行列の出発式に臨む（前列右端が筆者）

通信使と関連する演劇を上演していたのだ。この演劇こそ、朝鮮通信使の上陸のため波止場を築きながら住民の間で起こった葛藤や和解をテーマとした創作劇「石の唄ひびけ」であった。

小さな島の子どもたちは、演じながら何を感じ、将来韓国をどのように考えるだろうか。大人が教科書問題や領土問題で争うのを正しいと考えるのか。さもなければ困難に耐えぬきながら、互いに理解し、助け合うことが望ましい方法だと考えるだろうか。何事も確定的に断言し結論を述べることはできないが、幼い時に相手を正しい方法で理解するようになるのは大切なことである。彼らはこの演劇を通じて、韓国に対して悪い感情より、良い感情を持つようになるだろう。遠い昔から今日まで両国の大人たちが犯した過ちを繰り返さないだろう。それだけでも彼らが演じることに価値がある。固い石が歌う唄—どれほど象徴的だろうか。また、その響きへの反響はどのようなものだろうか。

私は帰国後、この演劇の招聘を準備

している。様々な障壁もあったが、ついに2005年9月に釜山でこの演劇が幕を開けることになった。釜山の子どもたちが一緒に演じられるよう、一部に手を加え、釜山と相島の子どもたちがより親しくなるように姉妹校も紹介するつもりである。

韓国と日本の文化交流というとそんなに難しくもなく、大そうなことでもない。小さなことから始めるのが大切なのだ。対馬、下関、牛窓、大阪の朝鮮通信使行列の再現も、このような次元から出たものである。西洋のことわざに「彼を理解することは、彼を愛することである（To know him is to love him）」という言葉がある。相互理解が友好の固い裏打ちになるのだ。

このたび、日韓文化交流基金から私には身に余る賞をいただいたことも、過去より未来の基礎固めに、より多くの力を注ぐようにという激励ではないかと思う。個人史に光を当ててくださった皆さまに感謝申し上げ、韓日文化交流により一層の力を注ぐことを誓いたい。

2005年度 下半期助成対象事業

2005年度下半期助成事業には60件の申請があり、この中から31件への助成が決定しました。

青少年・草の根交流（日韓共同未来プロジェクト） 13件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
第5回北東アジア子ども自然体験文化交流事業 in KOREA	北東アジア子ども交流事業実行委員会	2005/10/1 - 4	ソウル
“日韓国交正常化40周年・日韓友情年2005”記念 長崎日韓交流写真展	長崎日韓交流写真展実行委員会	2005/10/4 - 9	長崎県美術館
ハンマウム文化祭2005	NPO法人 狭山市ハンマウムの会	2005/10/12	又石中学校
日・韓・中 墨の文化交流展	NPO法人 国際芸術文化協会	2005/10/17 - 20	ソウル・在韓民国日本国大使館公報文化院
アリスフェスティバル05 (第9回アジア小劇場演劇ネットワーク参加)	NPO ARCタイニアリス	2005/11/8 - 10	東京・タイニアリス
復活！朝鮮通信使 —国際交流・多文化共生バレードin 蔵造りの町並み	埼玉・コリア21	2005/11/13	埼玉・川越蔵造り通り
YWCA日韓青年交流プログラム	財団法人 日本キリスト教女子青年会	2005/11/18 - 21	京都YWCAほか
日韓国交40周年記念公演 李鏞・作「カウンターポイント」日本招へい公演	三・一の会	2005/11/30 - 12/7	東京・三百人劇場
日韓青少年歌合戦 (JAPAN KOREA YOUTH MUSIC EXCHANGE)	財団法人 北九州国際交流協会	2005/12/19	福岡・北九州芸術劇場
第36回日韓学生会議	日本国際学生協会	2005/12/23 - 28	和歌山・京都
「現代陶芸—新世代の交感展」に伴う 日韓若手陶芸家交流事業	「現代陶芸—新世代の交感展」 実行委員会	2006/1/7 - 22	愛知県陶磁資料館
日韓の大学生間の知的交流と異文化コミュニケーション	韓日社会文化フォーラム	2006/1/29 - 2/3	沖縄大学
International Business Contest for Students OVAL SEOUL	OVAL SEOUL 実行委員会	2006/2/8 - 14	ソウル大学校

シンポジウム・国際会議 9件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
第2回世界都市河川川ルネッサンスフォーラム	特定非営利活動法人渋谷川ルネッサンス	2005/10/1 - 3	聖心女子大学、ソウル市内
日韓友情年2005記念《日韓交流高麗楽公演》	瑞穂雅楽會	2005/10/7 - 10	学習院大学ほか
本が繋ぐ近い都市(まち):日韓国書館交流2005	日韓国書館交流2005実行委員会 (九州大学附属図書館)	2005/10/19 - 21	アクロス福岡、 九州大学附属図書館
日韓友情年2005記念 日韓俳句大会並びに講演会	ソウルジャパンクラブ(SJC)	2005/11/11 - 13	ソウル市内
アジア史学会第14回研究大会(福岡大会)	アジア史学会	2005/11/18 - 22	九州国立博物館
東アジア国際理解シンポジウム —東アジア文化圏を内面から結ぶもの	帝塚山学院大学国際理解研究所	2005/11/25	大阪国際交流センター
国際交流 学生・市民対話シリーズ 第一回主題:「和解への対話」	大阪女学院大学	2005/12/3 - 2006/3/12	大阪女学院大学、大阪国際交流センターなど
日韓「詩のシンポジウム」 (詩人、萩原朔太郎と日韓近・現代詩の集い)	非営利活動団体(群馬県) 前橋朗読研究会「BREATH」	2006/2/26	群馬・煥乎堂書店(または前橋文学館)
韓国と日本の絵本(仮題)	財団法人 大阪国際児童文学館	2006/3/12	大阪府立国際児童文学館

芸術交流 9件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
ソウル・インターナショナル・ダンス・フェスティバル オープニングプログラム「SHIP IN A VIEW」公演	ババ・タラフマラ	2005/10/4 - 9	芸術の殿堂(ソウルアーツセンター)
韓日友情年記念オペラ「蝶々夫人」	日韓「友情の花束」実行委員会	2005/10/10 - 24	京畿・トギャンオウリムヌリオウリム劇場
日韓友情年2005芸芸展	社団法人 いけばなインターナショナル	2005/10/26 - 28	ソウル・在韓民国日本国大使館公報文化院
内浜落語会 釜山特別寄席(仮)	内浜落語会	2005/10/29 - 30	東亜中学校
アンサンブル東風韓国公演 [朴銀荷帰国記念リサイタル]、 及び「An-Um＜雅音＞第2回定期演奏会」出演]	アンサンブル東風	2005/11/6 - 10	ソウル・ヨンサンアートホール、 芸術の殿堂(ソウルアーツセンター)
日韓友情年認定公演 金利息 韓舞 白い道成寺2005	白い道成寺2005実行委員会	2005/11/14 - 17	東京・新国立劇場、 名古屋市青少年文化センターほか
オペラシアターこんにゃく座 韓国公演2005	有限会社オペラシアターこんにゃく座	2005/11/28 - 12/12	ソウル、京畿、大田ほか
「ジュエリーとオブジェのパレット・ 日韓現代メタルアート」ソウル展	「ジュエリーとオブジェのパレット・日韓 現代メタルアート」ソウル展実行委員会	2006/2/1 - 14	韓国陶芸文化振興院
韓国 針の匠—崔福姫服飾作品展(仮)	京都造形芸術大学	2006/2/6 - 3/9	京都造形芸術大学

日韓文化交流会議 シンポジウム「日韓文化交流の未来」



日韓文化交流会議は、韓日文化交流会議と共に「日韓友情年2005」を記念し、これまでの日韓両国の文化交流の足跡をたどり、今後を展望するシンポジウム「日韓文化交流の未来」を開催しました（6月15日（水）、東京・浜離宮朝日ホール）。

この日のシンポジウムでは、両国座長による基調講演、会議メンバーを含む4人の識者によるパネルディスカッション（コーディネーターは隈元信一朝日新聞論説委員）、会議メンバー3人による交流体験報告が行われましたが、ここでは基調講演とパネルディスカッションの内容を紹介します。

（写真提供：朝日新聞社）

基調講演

過去を伝え 未来志向の関係構築を

平山郁夫

自分は72年に明日香村で発見された高松塚古墳壁画の現場調査作業に携わったが、それ以前に、卑弥呼の墓が大和地方に存在するという想像の下、その墓に存在するであろう壁画を描いた。北朝鮮にある高句麗古墳壁画をモデルとしたものであったが、実際の高松塚の壁画は想像通りのものであり、驚いた。これをきっかけに高句麗古墳を世界遺産にする方法を考えるようになり、ユネスコ親善大使として平壤を10回訪問したし、また、99年の日韓文化交流会議第1回会議で提案、日韓の委員から賛同をいただいた。

私は、自身の被爆体験を原点として平和を訴えてきたが、今後の東アジア

の平和も、威圧ではなく尊敬と文化によって実現させたい。

日本の古代には、朝鮮半島の人々から多く文化的恩恵を受け、また江戸時代にも、朝鮮通信使を通じて文化の交流が続けられた。残念ながらその後日本は韓国を植民地とし、また戦争で多くの犠牲者を出したが、このような歴史を胸におさめながら、東アジアに未来志向の関係が構築されることを望む。

「韓日文化の輪」を世界へ

金容雲

古代の韓国と日本では漢字を用いて言葉を表記していたが、その後韓国ではハングル、日本は仮名と、それぞれ異なる文字が生まれた。このようにアジア3国の文化は、そのままねたものではなく、その地域、民族の知恵、創意が発揮されたものである。ドイツの思想家ヘルダーが「黄金の連鎖」と呼んだ人類のつながりを想起させる。

文化交流によって国際化が進むと、同時にナショナリズムも生じる。朝鮮通信使が往来していた時代、日本ではナショナリズムが台頭し、その結果通信使は断絶した。しかし、現在の日韓交流は、年間400万人が往来する状況を迎えており、時代は逆転しえない方向に向かっている。象徴的に、01年に

日本の天皇陛下が、「桓武天皇の母が百済の武寧王の子孫であると『続日本紀』に記されていることに韓国とのゆかりを感じています」と発言された。私たちは、文化交流の中で互いに刺激し合い相手を率直に認識することができる、成熟したレベルに達したと言える。今後は、両国の個性ある文化を高め、韓日文化の輪を世界に発信していきたい。

パネルディスカッション

直接の触れ合い通じて 「意識の共有」を

——98年以降、韓国が日本大衆文化の開放を実施して以来、交流が広がった。一方で竹島問題、教科書問題が再燃しているが。

鄭 民間交流にも影響が及んだのは事実。しかし両国間の人的交流数は増大を続けており、このような人的交流、知的交流が続けば、互いの認識を近づけていくことも可能だろう。

黒田 98年の日本大衆文化開放と02年のW杯の共催を契機に、韓国人の日本に対する見方に変化が現れた。一方「韓流ブーム」をきっかけに、日本にも韓国に対する憧憬が生まれ、心を寄り添わせつつある。政治よりも何よりも、文化が国民をリードして、二つの

平山郁夫
日本側座長





国を近づけていくと実感した。

李 明治維新以後欧米に学ぼうとしていた日本は、最近になってアジアに目を向け始めた。韓国には今も清算されていないトラウマがあり、日本に対してこれに基づいて反応することもあった。しかし、韓国人も精神的に成熟して日韓関係を構築することができた。その中で韓流ブームが起り、韓国のドラマを見てそれを受け入れることができる広い心を日本人が持っているという肯定的な面を発見できた。

小此木 国の間では一方が極端な政治体制を取っている場合には、「体制摩擦」が生じる。自分が72年に初めて韓国に行った直後に戒厳令が敷かれ、その後も様々な政治的問題が生じた。一方日本国内にも韓国に対する強い偏見があった。韓国の経済発展と民主化、日本人と韓国人の国際化が土台となって、両国民の意識の変化が起こった。今後は「体制の共有」から「意識の共有」へ向かうだろう。ナショナリズムが厄介な問題であることには変わりない。韓国は若い国であり、ナショナリズムのエネルギーは旺盛。日本にも独特のナショナリズムがあり、これらを調整しながら市民レベルの交流を進めることが重要。

——未来について。日本ではインターネットがナショナリズムの発露の場として使われている面があるが、韓国ではどうか。

鄭 若い人たちがナショナリズムを引き起こす一つのメディアとなってい

る。政治的、社会的な論争に対して賛成と反対に意見を分裂させたり、世論を一方に持っていきたりする傾向がある。日本文化に関するポータルサイトも数多い。ネットでの情報交換がナショナリズムと結合すると、感情的になりやすい若者たちを間違った方向に誘導してしまう。

黒田 竹島問題の時に韓国にいた。メディアが国民を煽っている印象を受けたが、実際に会った一般の人は冷静で、直接触れ合うことで培われる信頼の強さを感じた。大人にとっての壁を難なく乗り越えることができる、次の世代を育てていくことが、これからの私たちの使命だと思う。

李 過去の話もせざるを得ない。日本人は、韓国人はなぜ執拗に過去を持ち出すのかというのが、間違った部分をきれいに消さないとその上に新たな絵を描くことは困難。今後は韓日、東アジアで、歴史の問題を扱ったドラマや映画を作るべき。視点を共有して問題を解決していく作業を経ればお互いの理解も深まるのではないかな。

鄭 「冬のソナタ」のヒットに対して、韓国でも「ハウルの動く城」などの日本映画が多く観客を集めた。この現象は二つの共通点を持つ。両国民に共通に訴える情緒、そして文化商品としての優秀性である。韓国と日本が戦略的に提携し、文化商品を共同開発することも可能ではないか。

小此木 まとめて3点述べたい。第一は、歴史論争は、共通の未来のために建設的な形で行うべきだ。第二に、意識の変化は交流を通じて起こるものであり、近年の日韓間の往来は必ず意識の変革につながる。第三は、日・韓は長い間、中国文明圏の周辺にあって競争してきた。将来における競争もお互いに対する刺激という意味でよいものではないか。

基調講演



平山 郁夫
(ひらやま いくお)
東京藝術大学学長
日韓文化交流会議座長



金 容雲
(キム・ヨンウン)
漢陽大学校名誉教授
韓日文化交流会議座長

パネリスト



小此木 政夫
(おこのぎ まさお)
慶應義塾大学
法学部教授
日韓文化交流会議副座長



黒田 福美
(くろだ ふくみ)
俳優



鄭 求宗
(チョン・グジョン)
東亜ドット・コム
代表理事
韓日文化交流会議副座長



李 柱益
(イ・ジュイク)
ボラム映画社代表理事
韓日文化交流会議委員

コーディネーター

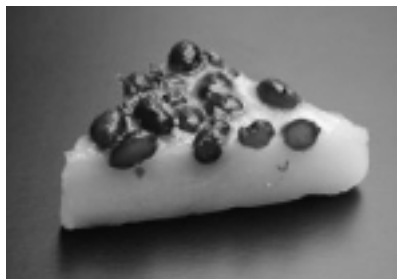
隈元 信一
(くもと しんいち)
朝日新聞論説委員

朝鮮通信使と
日本の6月の民俗

日本人は6月を水無月という。この時期に日本を訪れた朝鮮通信使たちは、日本人の生活をどのように見ていたのだろうか。彼らの記録を年代順に整理してみよう。まず慶暹は1607年、一行とともに江戸に向かい、5月18日頃に富士山麓を通過した。その時の様子を、彼は次のように記録している。

日本は海中にあり、風土は蒸し暑い。冬の寒さは耐えられないが、夏の暑さはそれほどでもない。国の風俗は、6月初1日に氷を食べ、一年の暑さを追い払う。国内に氷はないが、ただこの山（富士山）だけには一年中ある。しかし氷を割って輸送する間に溶けてしまうので、辛うじて天皇と関白に捧げるのみである。氷を手できない者は、12月初1日に氷塊のような餅をつくって保存しておき、6月の氷の代わりに食べるという。（慶暹『海槎録』）

この記録によれば、1607年当時日本人は暑気払いのために、6月1日に氷を食べていたことがわかる。その氷は富士山から運ばれる大変貴重なもので、天皇と関白しか食べられなかった。



京都の氷を模した菓子「水無月」

氷を食べられない庶民は、12月初めに氷の形の餅を作っておき、この日に食べたい。

次に『海槎録』を著した慶暹から100余年後の1711年に日本に往来した任守幹は、慶暹の紹介記事をほとんどそのまま踏襲している。10月14日の記録に、彼は次のように氷のような餅を食べる風習を紹介している。

聞くとところによると、この国の風俗では、6月1日に氷を食べることを常としており、暑さを払う方法だという。国内に氷は無いが、ただこの山（富士山）のみにある。それ故、毎年ここから氷を取り出して、倭皇及び関白にのみ捧げる。氷を手できない者は、正月1日に餅を氷の形に作っておき、持して6月にこれを氷の代わりに食べるという。（任守幹『東槎日記』）

一読してわかるように、任守幹の文章は慶暹のものと酷似している。実際に任守幹がどこまで6月1日に日本人が氷を食べる風習を把握していたのかには疑問が残る。こうした日本の風習に対するそっけない態度は、『海游録』を書いた申維翰も同じであった。6月に氷を食べる風習について、彼は次のように書いている。

冬の寒さは猛烈ではなく、昔から雪が1尺も積もることはない。この国には氷を貯蔵する方法がない。富士山の山頂には一年中氷が凍っている。端午の日にはそれを取って天皇と関白の宮中に捧げる。庶民は餅を氷の形に作って、それを食べる。これを暑さをしのぐ方法というのだ

が、じつに笑うべきである。（申維翰『海游録』）

申維翰によれば、天皇と関白が富士山から運ってきた氷を食べ、庶民が氷の形をした餅を食べるのは、6月1日ではなく5月の端午だと説明している。本当に5月の端午の風俗だったのだろうか。今回調査してみたが、5月の端午にそうした民俗は日本にはないことがわかった。慶暹や任守幹が紹介しているように、やはり氷のような餅を食べる風習は6月1日のものであろう。

申維翰は、慶暹や任守幹のように日本で6月を迎えていないし、また端午も直接体験してもいない。したがって、申維翰が氷のような餅を食べる風習に関連したことを記録しようとするはずである。申維翰は、先行の通信使の記録を読み、また彼らから直接話も聞かなければならなかっただろう。それにもかかわらず、この風習を5月の端午のこととして紹介しているということは、先行の記録を丹念に精読していなかったことを意味している。彼の日本民俗観を垣間見ることができる。

1748年に使行で行った曹命采の態度も、申維翰とそれほど変わるものではない。彼はこの部分について次のように描写している。

一人の倭人が、手に小さな木の函を持ってきて、「馬州守が前例にならってさし上げるものでございます云々」と言ったので、下人をしてこれを受け取らせた。……（省略）…道中開けてみると、即ちインジョルミ*（引載餅）のような餅であった。これを食べれば暑さを払うこと

ができると言う。己亥年（1719）使行の時に初冬にここを通ったときも、この餅を供饌され、暑さを払うという。はなはだ笑うべきことである。（曹命采『奉使日本時間見録』）

彼は富士山を通り過ぎるときに韓国のインジョルミのような餅を供された。その餅は「食べれば暑さを払うことができる」と説明されていることから、それは6月1日に氷の代わりに食べる餅のことであるのは間違いないだろう。しかし、しきりに日本人がすすめても、曹命采はそれを信じなかった。というのも、1719年の使行が初冬にここを通ったときに同じ餅がだされたことを知っていたからである。いくら目の前で夏には暑さを乗り越える呪術的な力を持つものと説明されても、すでに「笑うべきこと」として認識されていた餅を出されては、曹命采が信用できないのも無理はない。彼もやはり、先行する使行たちと同様に、日本の風習に対する疑いの眼差しを保持していたのである。

朝鮮通信使と氷の朔日

では、朝鮮通信使たちが「氷塊のような餅」「氷の形に作った餅」と表現した餅は、一体いかなる物を指すのであろうか。実際に、こんな餅があったのだろうか。これにヒントを与えるのは、「12月1日に作る」と「正月1日に作る」と言った慶暹と任守幹の記録である。その記録は時期においては多少の違いがあるが、冬に作って6月に食べるという点では一致している。

こうした餅を日本では「氷餅」とい

う。これは関西よりも主に関東や東北地域で作られている。今も寒い冬の時に何回も繰り返して干して保存し、夏の農繁期に取り出して茶碗に入れ、お湯を注げばやわらかく溶け、間食として食べた。一種の非常時に食べる保存食品であったのである。

この餅を、日本側は朝鮮通信使の一行が富士山を通るたびに間食として供したのである。もしかすると、この氷餅は富士山麓の名物だったのかもしれない。そして曹命采の記録に見られるように、氷餅が韓国のインジョルミのような餅だとすると、日本人が通信使の口に合うように、氷餅をやわらかくして切った後に、わざわざきな粉をつけて接待したと見られる。日本側はそれなりに最善を尽くして、朝鮮通信使たちに時節の食べ物としてその地域の名物を提供したと思われる。

こうした事情を理解していなかった朝鮮通信使たちは、初冬に作った餅をなぜ夏の暑さを防ぐために食べるかという日本人の説明にいつも疑問を抱いていた。こうした誤解は、曹命采自身の先行資料の調査不足、あるいは日本側の説明不足によって生じた現象かもしれない。日本の氷餅のような習俗を持たず、また外交を優先する彼らにとって、暑さ予防のために餅を食べるという簡単な説明だけでは、「氷の朔日」の日本民俗を理解するということは初めから無理だったのかもしれない。

以上のように、朝鮮通信使たちは日本の「氷の朔日」の民俗を正しく理解しておらず、誤解する部分も少なく



貴船神社で6月に行われる夏越の祓。この頃氷を食べたという

かった。しかし、当時の日本人は6月1日に暑気払いのために天皇や関白のような上流階級は氷を食べ、一般庶民は12月や正月初めに餅を作って干したものを氷の代わりに食べるという日本独特の民俗文化を、記録を通じて詳しく知らせていることは、彼らの予期せざる文化交流の成果といえよう。

京都には6月に食べるお菓子として「水無月」というものがある。ある和菓子屋の主人によれば、それは6月に氷を食べられない一般庶民が、氷の形にした餅を作って食べたことから始まったという。こうした習俗を海外に初めて知らせたのは、まぎれもなく朝鮮通信使たちであった。彼らの記録は、当時の日本の民俗文化を読み取る宝庫といえるのかもしれない。

*餅の一種。もち米（粉）を蒸してマッチ箱大くらいに切ってきな粉をまぶしたもの。

PROFILE

の そんぷあん



蔚山大学校人文学部日本語日文学科教授。昨年12月から11月30日まで、国際文化研究センター来訪研究員として滞在中。著書に『箸から見た日本文化』（教保文庫、1997年）、『日本のなかの韓国』（蔚山大出版部、1997年）、『日本の古事記』（芸典社、1999年）、『日本神話の研究』（宝庫社、2002年）などがある。

次世代の韓日ネットワークの構築のために —「韓・日次世代学術フォーラム 第2回国際学術大会」を終えて—

東西大学校教授、韓・日次世代学術フォーラム代表 張済国

去る6月25日(土)、26日(日)の両日、韓国・東西大学校において「(日韓友情年2005記念事業)韓・日次世代学術フォーラム 第2回国際学術大会」が日韓文化交流基金などの協賛で開催された。本学術大会を主催する「韓・日次世代学術フォーラム」は、韓日両国の大学院(修士・博士課程)に籍を置く人文社会分野の若手研究者たちに学術交流の場を提供することを目的とし、2004年度に設立された団体で、「次世代」と「学際的・学融合的」の二つが大きなキーワードとなっている。

「次世代」、すなわち韓日の大学院生に焦点を当てた本フォーラムでは、彼らが主役となる国際学術大会を開催することにより、両国の未来を担うべき研究者としての自覚を彼らの中に育み、さらには韓日新時代に向けた人的ネットワークの構築を促したいと考えている。また、専門領域があまりに細分化し、実社会と乖離してしまった感のある韓日の人文社会分野の研究において、その閉塞感を打破し、実社会に貢献しうる新たな研究を育むため、既存の学問領域に捕われない、「学際的・学融合的」な研究を育てていくことを目指している。

多彩な分野の院生・教授が参加

第2回目となるこの度の国際学術大会では、「東アジアにおける人文社会研究の新動向」という共同テーマの下、韓日の68大学から大学院生および引率教授など、約350名が一堂に会した。分科別発表会では、「国際関係」「法律・政策」「経済・経営」「歴史」「教育・言語」「社会」「宗教・思想」「民俗・人類」「文学・女性」といった9つの分科において、75本の多彩な研究発表が行われ、司会、発表、討論などの全てを自ら担当した韓日の大学院生たちが自由で熱のこもった発

表と討論を繰り広げた。

その後の全体会議では、各分科の代表から分科発表会での模様が紹介され、各専門領域での韓日の研究手法の違いなど、さまざまな興味深い話題が提供された。また、本フォーラムでは、日本側98名(54大学)、韓国側84名(33大学)の先生方が諮問教授として、発表者・討論者の推薦、学術大会への引率といった役割を担ってくださっているが、分科別発表会や全体会議の場で、これらの先生方から若手研究者にさまざまな視点からのアドバイスが与えられるようになっており、本フォーラムの教育的な側面を支えている。

共通の学問の担い手として意識

本学術大会の大きな特徴の一つとして挙げられるのが、これまで日本と韓国の間に学問的な交流が皆無に等しいと言われてきた学問領域の人たちが多く参加したことである。彼らが自らの専門分野を通し、学問的に論じ合うことにより、お互いの考え方やものの見方が分かるようになっただけでなく、相手を意識し始めるようにもなったと思われる。これからの韓日関係が新たな展開を見せるにはこのような出会いが必要となるであろう。参加者から「これまで日本に関心はなかったが、日本人と積極的にコミュニケーションをとってみたいと思った」、あるいは「自分の研究にも韓国という視点を取り入れることにより、研究の幅が広がられることに気づいた」といった意見が聞かれるなど、主催者側の思いが着実に



二日間にわたって日韓の大学院生が発表と討論を繰り広げた

実を結んでいると実感できるのは嬉しい限りである。

いくつかの課題を残しつつも、昨年の第1回大会に比べ、発表内容、プログラム、大会運営など様々な面で質の向上が見られたという評価をいただく中、第2回国際学術大会は幕を閉じた。来年第3回大会では、日本での開催と中国からの発表者の招聘を計画しており、韓日に中国を含めた名実共に東北アジア全体の次世代研究者の交流の場へと本フォーラムを展開していきたいと考えている。また、将来的には本フォーラムに参加した若者たちが本格的に社会に進出していったとき、本フォーラムで構築された人的ネットワークを通じ、韓日そして東北アジアに今なお横たわる葛藤を解き、この地域の新時代をリードする人材へと育ててくれることを強く期待している。

PROFILE

ちゃん じえい いくつ



米ジョージ・ワシントン大学院で政治学修士、慶應義塾大学大学院で政治学博士号を取得。米国弁護士。伊藤忠商事(株)政治経済研究所を経て、モレックス(株)北東アジア地域本部で弁護士・監査役として活動。現在、韓国・東西大学校日本研究センター所長。

シネマコリアは1998年に名古屋で設立された。以来、劇場未公開の韓国映画を中心に様々な映画を紹介している。当初は名古屋では未公開だが字幕の付いたフィルムが存在する作品を上映していただけだったが、2002年からは日本初公開作品を上映するようになり、東京・大阪・札幌など、名古屋以外の地域でも開催している。まだ配給の付いていない作品を上映するため、字幕も自前で制作しての上映だ。

歴史コメディ『黄山ヶ原』

今年も7月から8月にかけて全国でシネマコリア2005が開催された。上映作品は4作品。いずれも日本初公開作品である。例年、「日本人にとって理解しやすい作品」を選定するように心がけているのだが、今年は一作品、あえて「日本人にとって理解しにくい作品」を選んでみた。三国時代、新羅と百済の戦いを描いた歴史コメディ『黄山ヶ原』である。この映画は韓国では大ヒットした作品だが、(1) 韓国人なら誰でも知っている韓国史における歴史的事実を日本人は全く知らない、(2) 外国人には直接的に理解しにくい言葉遊びを駆使したギャグ満載のコメディである、(3) 字幕ではその面白さを訳出しにくい方言が全編にわたって使用されている、という3つの意味で、日本人にはもっともその面白さが伝わりにくい映画だ。事実、韓国の配給会社に上映をオファーしたところ、



好評だった歴史コメディ『黄山ヶ原』

「ほかの作品を上映した方がよいのでは？」と逆提案されたほどである。

では、なぜ、敢えてそのような映画を選んだのか？ 理由は2つある。1つは、映画そのものの出来は極めて良いため、たとえギャグなどは理解できなくても、単純に歴史ドラマとして鑑賞しても十二分に楽しめる、という作品に対する信頼感。もう1つは、昨今のブームによって韓国語を勉強し、かつ韓国の歴史や文化・習慣などに対する知識を身につけている人が増えていると言われているが、実際のところ、この映画の面白さがどの程度日本の観客に伝わるのか試してみたいという実験精神だ。映画祭での上映は、ギャグや言葉遊びをセンス良く日本人にも分かる形で訳出してくれることで定評のある翻訳家に日本語字幕を依頼したうえで、歴史的な背景はパンフレットで解説し、方言の面白さや言葉遊びの妙は上映後のトークでレクチャーするなど、この映画の魅力が伝わるよう最大限の努力をして臨んだ。その結果は…

映画のパワー

今回感じたのは、やはり映像の威力は凄まじい、ということである。観客は、言語上の面白さを100%は理解できなかったようだが、笑うべきところで笑い、泣くべきところで泣き、最後には大いに感動した様子。加えて、韓国の古代史にも興味が芽生えた方々も少なくなかったように感じた。映画は非常に特殊なメディアだ。いったん上映が始まると、2時間という長時間の鑑賞を強いられる。最初は面白いと思えなくても、上映終了時に感動できていれば満足度は極めて高くなる。そして、感動すれば作品の背景などにも興味がわく。ほかのメディアではこうはいかない。テレビはつまらなければチャンネルを変えられるし、本は興味がわかなければ途中で閉じられる。韓国



シネマコリア2005ポスター

の古代史を勉強しようと本を紐解いても、全く知らない人名・地名のオンパレードだと途中で投げ出したくなる。しかし、映画は上映終了まで鑑賞せざるを得ない。最初はとっつきにくかった人名・地名も映像付きだと興味がわきやすい。何度も出てくると自然と頭に入ってくる。そして、観賞後に「面白かった!」と思ってもらえれば、登場人物や時代背景について勉強してみようか、という気にもなる。恐らく映画を観た後だと、関連書籍はあつと言う間に読めてしまうだろう。主なストーリー、人名、地名などは映像付きで頭にインプットされている状態だから。

映画は芸術でありエンターテインメントであるが、それと同時に異文化理解のツールとして極めて有益な媒体であることを再確認させられた次第である。

PROFILE

にしむら よしお



シネマコリア代表。東海学園大学経営学部専任講師。新聞、映画雑誌、韓国カルチャー誌など、韓国映画についての寄稿多数。韓国映画紹介サイト「韓国映画とハングル (<http://www.seochon.net/>)」を運営。

日韓文化交流基金事業報告

第21回日韓文化交流基金韓国訪問団

8月9日から12日にかけて当基金の役員および文化関係者からなる「第21回日韓文化交流基金韓国訪問団」が韓国を訪問し、ソウル・慶尚北道において要人の表敬や懇談会を行いました。

日 程

8月9日	ソウル到着 大島正太郎駐韓大使表敬、 大使館員によるブリーフィング 日韓友情年2005交歓コンサート in ソウル鑑賞
8月10日	ソウルジャパンプラブ役員・ 特派員との朝食会 潘基文外交通商部長官表敬 裴鍾信文化観光部次官表敬 李洪九韓日文化交流基金会会長主催 歓迎午餐会 サムスン美術館 Leeum視察 藤村会長主催答礼晩餐会／ 第6回「日韓文化交流基金賞」授賞式
8月11日	大邱到着 金龍大慶尚北道行政副知事表敬 安東市視察（河回マウル、伝統芸能鑑賞） 基金フェローシップ経験者との晩餐会
8月12日	慶州到着 慶州視察（天馬塚、仏国寺） 帰国



金龍大慶尚北道行政副知事（前列左から3人目）表敬

参加者

団 長	藤村正哉	（財）日韓文化交流基金会会長、 三菱マテリアル(株)相談役
副団長	内田富夫	（財）日韓文化交流基金理事長
顧問	戸塚進也	（財）日韓文化交流基金常任理事、 掛川市長
顧問	熊谷直博	（財）日韓文化交流基金顧問、 前日韓文化交流基金理事長
顧問	竹内宏	（財）日韓文化交流基金評議員、 （財）静岡総合研究機構理事長
顧問	三浦隆	（財）日韓文化交流基金理事、 桐蔭横浜大学名誉教授
団 員	小山敬次郎	（財）日韓文化交流基金理事、 目白大学客員教授
団 員	竹下勅三	（財）日韓文化交流基金理事、 元日本鉄鋼連盟常務理事
団 員	楢崎正博	（財）日韓文化交流基金理事、 前関電産業(株)社長
団 員	梅田博之	麗澤大学学長
団 員	石川捷治	九州大学韓国研究センター長
団 員	前田二生	指揮者
団 員	大竹洋子	東京国際女性映画祭ディレクター
団 員	松尾修吾	国際交流基金日本語国際センター所長、 日韓文化交流会議副座長
団 員	黛まどか	俳人、日韓文化交流会議委員
団 員	品田雄吉	映画評論家
団 員	中山隆夫	元日本鉄鋼連盟常務理事
団 員	堀泰三	（財）日韓文化交流基金理事・事務局長



安東・河回マウル視察

日韓ボーイスカウト・ガールスカウト交流事業

(財)ボーイスカウト日本連盟および(社)ガールスカウト日本連盟への委託事業であるスカウト交流事業が、ボーイスカウトは8月1日から12日まで、ガールスカウトは7月31日から8月8日までそれぞれ行われ、各地で韓国スカウトとの交流を深めました。

日韓ボーイスカウト交流日程

8/1	成田空港到着	歓迎夕食会
8/2	東京都内見学	浅草寺、東京タワー、江戸東京博物館
8/3-8/8	地方(石川、千葉)プログラム	野外生活プログラム、ホームステイ
8/9-8/11	日韓スカウトフォーラム (石川県金沢市にて開催)	開会式、仲間作りプログラム、基調講演、 パネルディスカッション、分科会、全体会、 金沢市内見学など
8/12	中部空港より帰国	



スカウトフォーラムでのパネルディスカッションのようす

日韓ガールスカウト交流日程

7/31	中部空港到着	歓迎夕食会
8/1-8/3	愛・地球博プログラム	韓国伝統文化(音楽、踊り、手遊びなど)を紹介
8/4-8/7	地方(埼玉、広島)プログラム	埼玉-「ルーツを訪ねる」として高麗神社や 和紙の里などを見学 広島-「平和を共に考える」として県内の平和 行事に参加、厳島神社などを見学 ホームステイ
8/8	成田、広島空港より帰国	



愛・地球博会場で歌と踊りを披露

公募プログラム案内

2006年度 招聘・派遣フェローシップ

2006年度のフェローシップの申請は、招聘フェローシップが10月4日から31日までに韓日本国大使館、総領事館で受け付け、派遣フェローシップが10月3日から31日まで日

韓文化交流基金で受け付けます。申請の要項および書式は、基金ウェブサイトからダウンロードして入手できます。

2006年度 人物交流助成

2006年度(2006年4月～2007年3月)の人物交流助成の申請を、2006年1月4日から2月1日まで受け付けます(2006年度は年1回の募集となりますのでご注意ください)。

詳しくは募集要項をご覧ください。要項および申請書をご希望の方は、基金ウェブサイトからファイルをダウンロードするか、基金に直接お問合せください。

■支援の対象と上限額

		青少年・草の根交流	国際会議・シンポジウム	芸術交流
団体の申請資格	日本所在	○	○	○
	韓国所在	○	○	×
対象費目	渡航費	○	○	○
	宿泊費	○	○	○
	会場借用費	×	○	○
	資料作成費	×	○	×
	通訳費	×	○	○
上限金額		100万円	50万円	

(○は支援の対象を示します)

維持会員制度へのご加入ありがとうございました

2005年3月23日～8月31日の期間に、115名の方に維持会員制度にご加入いただき、合計202万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます。お名前後ろの()内数字は、2口以上のお申し込み口数です(五十音順、敬称略)。

個人会員 99名

秋鹿敏雄	小此木政夫	阪田恭代	中野照男	藤原祥二
饗庭孝典	越智通雄	櫻井浩	中山隆夫	松井貞夫
秋月望(3)	片桐正夫	佐々木史郎	中山武憲	松本厚治
朝倉敏夫	金丸守男	佐々木武夫	並木正芳	松本誠一
李炯喆	菊竹淳一	柴公也	新納豊	黛まどか
石川武敏	岸真清	十四代 沈壽官	西川正雄	水谷啓子
石田賢	北出明	白川豊	西宮伸一	三谷博
伊集院明夫	金鳳珍	須川英徳	野入直美	實生泰介
石渡延男	金容媛	高羽陽	信原修	茂木敏夫
一村弘幸	木村光一	高正晴子	芳賀徹	山口晃
伊藤直樹	権五定	宝田寿哉	朴炫国	尹景徹
猪俣道也	権俸基	竹沢俊男	波田野節子	尹明憲
岩本卓也	久保新一	田中正敬	浜之上幸	尹勇吉
内海禎子(2)	熊谷直博	谷浦孝雄	林和彦	余田幸夫
馬越徹	熊野清貴	辻星児	邊恩田(2)	柳震太
大谷森繁	黒江克彦	角田房子	平田辰一郎	和田純
大西裕	小泉勇治郎	都恩珍	平山龍水	和田とも美
大畠英樹	齋木崇人	戸塚進也	廣川淑子	渡邊武
荻生茂博	齋藤美智子	中江新(5)	廣瀬愛子	渡辺浩
小倉紀藏	坂井俊樹	中尾美知子	福原裕二	

特別会員 16名

今枝敬雄	佐々木隆爾	駐札幌大韓民国総領事館	堀泰三(2)
内田富夫(2)	瀬島龍三	檜崎正博	前田二生(2)
梅田博之	千玄室	広島県日韓親善協会	三浦隆
小山敬次郎	竹下勅三	藤村正哉	水谷幸正

維持会員制度に関するお問い合わせ

日韓文化交流基金「会員制度」担当

TEL : 03 - 5472 - 4323 / FAX : 03 - 5472 - 4326 E-mail : webmaster@jkcf.or.jp